2018年度 高3・高卒 全統論文模試
（第Ⅰ部）

長尾 和宏 先生
18M00072 / 1～2 /No.87

1

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

もはや余命1週間と思われる患者さんに、

「死は誰にでも訪れますが、あなたがもし亡くなるとしたら、ご自宅か病院のどちらを希望されますか？」

と、何人かに聞いたことがあります。すると、

「自分はよくわからないので、家族に聞いてください」

と答えた方がいちばん多かった。次に同じ質問をご家族、なかでもキーパーソンに尋ねてみると、

「すべて先生におまかせします。私たちは素人なので、どうしたらいいかわかりません」

そう答えられました。私は、「死ぬのに素人もプロもありませんよ。どうかご本人とご家族でよく話し合って結論を出してくださいね」と説明しています。

またこんなこともありました。食事量が減った、認知症末期の患者さんがおられました。一流企業で働く、世間的には間違いなくエリートと呼ばれる息子さんに、胃ろう造設の是非について説明したのです。胃ろうの長所と短所、生活はどのようになるのか、胃ろうの管理方法、途中で中止ができるのか、どのような最期を迎えるのか、などを丁寧にお話ししました。そのうえで胃ろうを希望するかしないかについて選択してほしいという話し合いを、合計3回持ちました。

結局、息子さんの答えはこうでした。

「先生が決めてください。私は手を汚したくありませんので……」

目が点になりました。はっきりいって、とてもショックでした。

自分は選択できないというのです。「やっぱりよくわからない」とか「決められない」ならまだましと思います。しかし「手を汚したくない」とは、いったいどういうことなのか？　私は深く考え込んでしまいました。

しかし私は、この「手を汚したくない」という言葉は、多くの現代日本人の心をいい当てているのかな、とも感じました。

もし延命措置を希望しなければ、自分たちが親の命を奪うことになってしまう。それが「みずからの手を汚す」ことだと思っているのでしょうか。

もちろん愛しているからこそ選択できない、という思いもそこにはあるかもしれません。しかしだからといって最終的な選択を、お医者さんにゆだねるというきわめて日本的な思考回路はどうしたものなのか。よく解釈すればそれだけ信頼されているのでしょうか。ご家族は医者に決めてもらえば、自分の「手は汚れない」との考えのようです。自分自身や家族の「死」を医療者にゆだねて、のちに「あの時、やはりこうすればよかった」という自責の念に悩むこともないのでしょうか？

そういう場面に立ち会うたびに、私の脳裏に浮かぶ言葉があります。

「死の外注化」です。

現代人は人生でもっとも大切なはずのご家族の最期を、あまりにも医療者まかせにしすぎだと思います。それでよし、としているご家族がとても多い。

「自分はどこで死にたいか」「家族をどう看取りたいか」

これは、人生においてとても重要な問いではないのでしょうか。

今から50年ほど前の日本では自宅で亡くなる方が8割だったのに、現在は完全に逆転し、病院で亡くなる方が8割になっています。若い医療者でさえ、「人間はみな病院で死ぬもの」と信じて疑いません。多くのご家族が介護のみならず、大切な人の「死」までも、事実上、外注化しています。

死の外注化により、家族は傍観者の立場にとどまることができます。そして身近な人の死に直接かかわる機会もより少なくなっています。

みなさんは、ご自分の「最期の生き方」について、真剣に考えたことがあるでしょうか？　また最愛の人やご家族と、お互いの最期について、きちんと話し合ったことがありますか？

死は誰にでも訪れます。これだけは平等です。誰もがいずれ、100％死にます。ある程度の年齢になったら、その死について思考することは、きわめて当たり前であると私は思いますが、みなさんはいかがでしょうか。

最期の瞬間までどう自分らしくありたいか、大事な家族にどう過ごしてもらいたいかを考えることは、決して暗い忌むべき話題ではありません。むしろ建設的で、もっとも前向きな「生」そのものではないか。私はそう思います。

昨今、死生学の分野では、ACPという概念が提唱されています。ACPとはアドバンス・ケア・プランニング（Advance Care Planning）の略です。自分が終末期になった時、延命措置や療養の場をどのようにするのか。そしてどのような最期を望むのか。それをまだ比較的元気なうちから、患者さん自身とご家族、医療者でよく話し合い、記録に残しておくのです。先進国では比較的浸透しているプロセスですが、日本では残念ながらまだ始まったばかりです。

しかし死生観が希薄な日本人だからこそ、本格的な多死社会を迎える前にACPが重要なのではないでしょうか。日本においても、もしACPという考え方が普及すれば、延命措置を選択する時に、「自分は手を汚したくない」「わからない」「先生におまかせします」という言葉は、出てこなくなるはずです。

（長尾和宏『胃ろうという選択、しない選択――「平穏死」から考える胃ろうの功と罪』より、問題作成の都合上、一部改変）

問　「死の外注化」とはどういうことか、また、そうした状況に対して、あなたはどう考えるか、あわせて600字以内で述べなさい。